

今日も言うことが出来なかった。放課後の誰もいない教室で一人ため息を吐きながらも落ちようとしている夕日を見ていた。私、山本沙良はとある高校に通う二年生。一週間前急にお父さんの転勤が決まった。お母さんは私から見ても分かるくらいお父さんの事が大好きで当然お父さんについていくと言いだし、私もそれについてくことになった。私としては別に学校にも友達といった友達もないから今の学校に正直未練などない。昔から人と話すのが苦手な上、黒縁メガネで今時いないであろうきっちりとした三つ編みでいつも学校に行っているのでみんな私の事を根暗な子ども思っているみたい。小学生のときからみんなからそんな目で見られていたせいかもしれない。高校生にもなると慣れたのだ。だから、何も気にせずお父さんの転勤についていきたいところだが……。

「おーい、沙良。おはよ」

「おはよ、春君」

いつも通り、高校に向かってしていると後ろから声を掛けられた。彼の名前は渡辺春斗。家が隣同士で幼馴染。そして私の悩みの張本人。春君は私が友達がいらないのを知ってか隣のクラスなのによく私のクラスに来ては声を掛けてくれる。春君は陸上部のエースで人懐っこい性格とあの整った顔で女子からモテモテである。噂ではファンクラブが結成されているほどだとか。そんな春君がいつもクラスで一人の私と一緒にいるからか女子からはよく睨まれている。そんな視線に気づいていないのか春君はいつも私の所に来てくれる。春君は優しいから私の事が心配で来てくれるのだろうけど私はその優しさが時にはとてもつらくなる。私のせいで友達との時間があんまりないのだろうかとか彼女とかいるじゃないかとか考えだしたらきりがない。でも、私は春君が来てくれることがとても嬉しい。私は春君の事が好きになってしまったのだ。でも、いまさら告白なんて春君を困らせてしまうだけだろうし、何より今の関係が壊れてしまうと思うと怖くて言えなかった。ありがとう、春君。こんな地味な私をいつも気にかけてくれて。もう少しであなたのもとから卒業するのでもう少しだけ一緒にいさせて下さい。

春斗 side

俺には昔から好きな奴がいる。名前は山本沙良。家が隣同士でもうかれこれ長い付き合い合

いになる。沙良は、人と話すのが苦手。昔から友達も作らず休み時間はいつも一人でいた。最初はそんな沙良を見て小さい時から一緒にいたせいかな俺がそばにいないといけないという気になって出来る限り一緒にいた。でも、俺と一緒にいるときはよく笑ってくれる沙良を見てきて俺がずつとそばにいてあげたい、沙良の事が好きだと感じ始めた。沙良にカッコよく見られたい俺は陸上部に入って常に上位を目指した。高校も勉強があまりと得意ではなかったが、沙良と少しでも一緒にいたくて頑張ってた。沙良と一緒に高校に入学した。周りから見たら気持ち悪いかもしれないがそれぐらい沙良の事が好きだ。だから余計に言えなかったんだ、沙良の事が好きだなんて。沙良との関係が壊れると俺は立ち直ることなんて出来ないから。でも知らなかったんだ。まさか沙良との別れの日が近づいているなんて……。

はる君に言わなければいけないと思っながら気づけば引越しまで残り一週間まで来ていた。今日こそは言おうと思っって勇気を出して春君の教室に行ってみることに。教室を覗いて見ると春君は友達と楽しそうに話していて邪魔をしてはいけないと思ったら呼ぶことも出来ず私は自分のクラスに帰ることにした。すると後ろから先生が私を呼ぶ声が聞こえてきた。

「山本……。悪いが今日放課後、転校の件で少し話があるから職員室に来てくれるか？」

「はい、分かりました」

そう短い会話をした後私は自分の教室に戻った。

そして、授業が終わり掃除も終わったので職員室に行こうと扉を開けると春君が扉の前に立っていた。いつもは優しそうな表情をしているのに今日はいつもと雰囲気違って何か怖い表情をしていた。

「おい、沙良。ちょっと話があるんだけど時間あるか？」

「ごめん、春君。先生に放課後呼ばれてて今から職員室に行かなくちゃいけないの」

「そうか、俺も今から部活だから帰り沙良の家行くわ」

それだけ告げてはる君は走って部活に向かって行った。私も先生に呼ばれているので急いで職員室に向かった。帰る途中もあの春君の表情が気になって気付いたら自分の家の前帰ってきていた。私、何か春君に悪いことしたかな。それよりもせっかく春君が誘ってくれたから今日こそはつきり言わないと。

春斗 side

昼休みにいつも通り沙良の所に向かおうとすると友達につかまり今日は珍しく自分の教

室で友達と話していた。ふと、扉の方を見ると沙良が立っていた。沙良が俺のクラスに来るなんてめったにないから俺は嬉しくなって扉の方に向かおうとすると沙良が先生に呼ばれていた。

「……転校の件で話があるから放課後職員室に来てくれるか？」

「はい、分かりました」

今、転校って言ったか。俺はその言葉にあっけにとられてその場から動けなかった。沙良が転校するなんてウソだろ。沙良の転校が気になって午後からの授業は上の空だった。放課後、沙良と約束をして俺はその場から逃げるように部活へと向かった。早く部活が終わってほしくて、俺はただ淡々とメニューをこなしていった。夕日が落ちようとしているとともに部活も終わり俺は急いで沙良のもとへと急いだ。走ってきたせいか緊張しているせいなのか脈がすごく早くなっているがインターホンを鳴らした。

「はい」

「沙良か？ 俺、春斗」

玄関から出てきた沙良は制服から私服へと着替えていて髪もおろしていた。そんな姿に見惚れてしまいそうになったが何とか立て直して、沙良と家の前にある小さな公園へと足を運んだ。お互いベンチに座ったが二人の間には何だか気まずい雰囲気の流れていた。

「じ、実は、私も今日は春君に言わないといけない事があるの」

「それって、沙良が転校するって話か？」

沙良は驚いた表情で俺の方を向いていた。さらには下を向きながら少しずつ話していった。

「ごめんね。ずっと言おうと思ってたんだけど中々言えなくて」

「いつ、引っ越すんだよ」

「来週」

「来週ってもうあと一週間しかねえじゃん」

「うん……。あのね、春君いままでありがとう。こんな私をいつも気にしてくれて。私のせいではる君友達ともあんまり話すことが出来なかったでしょ？」

「何言ってるんだよ。俺は、今までそんな事気にしたことないから。そっか、俺はその話が聞きたかっただけだから、今日は練習で疲れてるから家帰るわ」

「そうだよ。ごめんね、わざわざ」

そういって、俺は一人家へと帰って行った。沙良が一人で泣いているのも知らずに……。次の日から、沙良と会うのが気まずくなって沙良のもとへ行くことはなかった。友達と話していても頭の中は沙良の事ばかり。そんな事していると沙良が引っ越すまで残り一日まで迫っていた。休み時間一人グラウンドを眺めていると、友達の陸が話しかけてきた。

「おい、最近山本さんの所行ってないけど。何かあったのか？」

「中学時代から同じで部活で親交の深い陸に沙良の事を全部話すことに。」

「お前は、山本さんとどうなりたいんだよ」

「どうって言われても。沙良は俺のこと何とも思ってたねえだろうし、この一週間ろくに顔

も合わせてないのに今更言えるかよ」

「お前がそういうなら俺は何も言わねえけど、山本さんが向こうで彼氏が出来てもお前は後悔しないんだな？　まだ間に会うんじゃないかねの？」

それだけ言い残し、陸は友達のもとへと行った。陸に言われた事を家に帰ってもずっと考えていた。さらに彼氏……。そんなの耐えられるかよ。何年沙良のこと思い続けてきたと思っただよ。無性に沙良に会いたくなってきた。でも、気付けばもう夜遅い。運よく明日は休み。俺は明日にかけることにした。

引越しの話をしてから春君がクラスに来てくれることは無くなった。一人の時間ってこんなにつらかったんだ。私の中で春君の存在はそれほどまでに大きくなっていった。無情にも時間は過ぎていきとうとう引越しの日が来た。荷物を業者の人に頼み私たちはお父さんの運転で引越しの場所まで行くことに。私が車に乗り込もうとすると、

「沙良、ちょっとだけ時間くれないか」

春君が立っていたのだ。お父さんたちに許可をもらい私たちはあの公園へ行くことに。

「沙良、ごめんな。沙良の事避けたりして。俺は沙良からも逃げてたし自分の気持ちからも逃げた。でも、もう逃げない。沙良、俺は昔からずっと沙良の事が好きだった。俺と付き合ってくれませんか？」

「春君……。私も自分の気持ちから逃げるのはやめにする。私、春君がずっと一緒にいてくれたのは小さい時からずっと一緒にいてくれたからだと思ってたの。でも一緒にいる間私春君の事を段々意識するようになってきたの、この一週間春君と離れて分かったの。私の中で春君がどれだけ大きな存在だったか。私も春君の事が大好きです。春君とお付き合いたいです」

春君はびっくりした表情だったけどすぐにいつもの優しそうな表情で私の事を抱きしめてくれた。

「俺ら両思いだったんだな。沙良、遠距離になっちゃうけど俺たちなら大丈夫だ。何年一緒にいたと思っただ。絶対に会いに行くから」

「そうだよ。私も絶対帰ってくるからね」

春君との別れを惜しみながら私は、引越し先へと向かった。春君のおかげで自分の思いに素直になろうと思えた。弱い自分からちょっとだけ卒業できたかな。新しい未来に向かって私の中の歯車は回りだそうとしている。

皆さんも好きな人に思いを伝いたいけど伝えれないっていう経験ありませんか？

終わり